

グリーン の 宗 教 思 想 と そ の 背 景

——とくに広教会との関連において——

行 安 茂

Green's Religious Thought and Its Backgrounds

——with Special Reference to Broad Church——

Shigeru YUKIYASU

はじめに

グリーン の 倫 理 学 を 貫 っ て い る 根 本 思 想 は 理 想 主 義 で あ る が、 か れ の 理 想 主 義 は キ リ ス ト 教 的 理 想 主 義 で あ る。 グ リ ー ン の 思 想 を 真 に 理 解 す る た め に は、 キ リ ス ト 教 を 知 る こ と が 不 可 欠 で あ る。 と こ ろ で キ リ ス ト 教 と い っ て も そ れ は か れ が 生 き て い た 第 19 世 紀 の イ ギ リ ス の 宗 教 界 の 動 向 を 無 視 し て は 具 体 的 に は 理 解 で き な い し、 グ リ ー ン の キ リ ス ト 教 に 対 す る 独 自 の 態 度 を 知 る こ と も で き な い。 こ の 意 味 に お い て 本 稿 は グ リ ー ン の 宗 教 思 想 が い か な る も の で あ る か を 問 い つ つ、 第 19 世 紀 の イ ギ リ ス の キ リ ス ト 教 の 動 き と こ れ に 対 す る グ リ ー ン の 態 度 を 考 察 す る こ と に よ っ て か か る 潮 流 の 中 に お け る グ リ ー ン の 位 置 を 明 ら か に し よ う と す る も の で あ る。 周 知 の よ う に 英 国 に は 英 国 国 教 会 と い う 国 民 教 会 が あ る が、 こ の 教 会 は 19 世 紀 に お い て 左 右 に 大 き く 動 揺 し た。 す な わ ち、 19 世 紀 初 期 に は 所 謂 「フ オ ッ ク ス フ ォ ー ド 運 動」 が ニ ュ ー マ ン を 中 心 と し て オ ッ ク ス フ ォ ー ド 大 学 内 に 起 っ た。 他 方 第 19 世 紀 か ら ウ ェ ス レ ー を 中 心 と す る メ ソ ジ ス ト 運 動 が 起 り、 19 世 紀 に 入 っ て も ま す ま す 強 くな り そ の 影 響 は 英 国 を 中 心 と し て 世 界 的 に 拡 大 し た。 オ ッ ク ス フ ォ ー ド 運 動 は 英 国 教 会 内 に お け る 「高 教 会」 (High Church) と い う 一 派 の 主 張 す る 運 動 で あ っ て、 上 流 階 級 に 受 け い れ ら れ 儀 式 を 重 視 す る。 こ れ に 対 し て メ ソ ジ ス ト 運 動 は 「低 教 会」 (Low Church) と よ ば れ る 一 派 の 運 動 で あ っ て 庶 民 の 信 仰 復 興 運 動 で あ る。 広 教 会 (Broad Church) は こ れ ら 2 つ の 運 動 の 中 間 に 立 っ て お り、 英 国 教 会 は 高 教 会 で も な く 低 教 会 で も な く て、 包 括 的 教 会 で あ る こ と を 主 張 す る 「中 道」 (midway) を 歩 む 教 会 で あ る。 さ て グ リ ー ン は こ れ ら の 運 動 を ど の よ う に 考 え た で あ ろ う か。 こ れ ら の 運 動 の 中 で、 ど れ が グ リ ー ン の 思 想 形 成 に 大 き な 影 響 を 与 え た か。 こ れ ら の 問 題 が 本 稿 に お い て 解 決 さ れ る べ き 課 題 で あ る。

1. メソジスト運動

メソジスト運動とは何であるか。それは何故起ったのであろうか。19世紀の英国教会はバトラーの神学によって代表されるように強力な学問的背景を以って支えられていたが、世俗的に墮落していたという。教会は心の信仰を失っていた。所謂「宗教的熱狂」(religious enthusiasm)が欠けていた。さらに、英国教会は中世以来教区組織であったので、この制度は産業革命の結果生じた人口の増大と新都市の急速な成長とに対して不適當であった。このような教会内外の事情の

ために、とくに新興都市の庶民は教会に対して不満であったとみてよい。ウェスレーはもともと「高教会派の人」であり儀式主義者であったが、後には高教会に対して批判的となった。それはかれが熱心に魂の救済を求めていたからであり、高教会派の信仰によってはかれの魂が救われなかったからである。ウェスレーの心には一方「燃ゆるが如き福音主義的熱心」と「信仰によってのみ義とされること」の2つが支配的であったが、他方罪と墮落とへ落ちる傾向性が強った。かれはこの矛盾に苦しめられて長い間求道生活をつづけたが、1738年5月24日「わが心の燃ゆるを覚えた」。

第3にメソジスト運動が起らなければならなかった理由は上層階級と下層階級、教育を受けた階級と教育を受けていない階級との間に対立・反目が生じ、これによってキリスト教信仰に危機が迫ってきたからである。とくに教育を受けた上層階級は理性を重視し知識に依存するところが大きいから、下層階級がもっている信仰の単純さと熱烈な宗教心とに対して懐疑的であった。かれらは啓示と人間の知恵とを対立させてものを考える習慣をもっていた。このような状況であるから英国教会は信仰をめぐる分裂が起る危険を含んでいた。ウェスレーは庶民の魂の救済の必要を感じて独自の信仰組織をつくり、海外に福音伝導を行ない、国内では監獄の改革、工場法の設置、奴隷の廃止を実現させた。

ではウェスレーによって始められたメソジスト運動の目的は何であったか。その特色は何であるか。まずあげられるべき点はかれが「組織」を重視したことである。第2は教義や儀式よりも説教が信仰にとって本質的に重要であることを主張することであった。これら2つ、すなわち組織と説教とは切り離すことはできなかった。ウェスレーの課題はいかにして原罪からの救いを達成することができるかであった。罪あるわれわれを救うためには一方ではわれわれの行為や動機がきびしく精査され反省されなければならないが、これをより効果的にするためには「組織」が必要であると考えた。「ウェスレーは組織なき情緒はほとんど効果をもたないことを知っていた。」⁽¹⁾ところで、人が魂の救済にあずかるためにはメソジスト社会の一員とならなければならない。会員には会員証のようなものが与えられるが、会員となるためにはつぎの問いに対して肯定するだけの熱心さがなければならなかった。「あなたはあなたのすべての欠点について聞かれますか。……あなたについてわれわれが恐れるかもしれないどんなことでもあなたに告げてよいですか。……」⁽²⁾人間は自己の欠点や罪や短所を洗いざらしに告白し、神にざんげする勇気がなければ conversion and assurance を得ることができない。

さてメソジスト教徒の教会は下部組織として地方巡回教会から構成される。巡回教区には監督者が置かれ、かれの下で地方巡回説教者が奉仕した。説教者はメソジストの各組織を巡回して説教し、俗人説教者を監督する。各組織には会計係が置かれた。俗人説教者や会計係は巡回教区の監督者によって選ばれた。巡回教区がいくつか集って教区ができ、これらの教区が集って宗派(connection)ができる。ウェスレーのメソジスト社会はこのような一大組織体である。会員は毎週の会合に出席し祈禱を捧げ、聖書の一部を読み、個人的体験を語る。俗人説教者は指導の方法と組織の方法とを学ばなければならなかった。

つぎにウェスレーの信仰について考察してみよう。かれの信仰はパウロや聖オーガスチンの信仰の伝統に立つものである。それは「信仰によって義とされること」を受けづくものであって、教義や儀式を問題にしない。ウスレーの信仰は説教によって人々の魂と心とに訴え覚醒させ、かくして罪を告白させ永遠の祝福を享受することを目的とするものであった。第2に、かれの信仰は博愛と結びついていた。この結合については「金の使用について」というかれの説教がよく示している。ウェスレーは何のために金を使うべきかを深く考えた。かれはつぎのようにいう。「あなたにでき得るすべてのものを得なさい。あなたにでき得るすべての人々を救いなさい。あなたにできるすべてのものを与えなさい。」⁽⁴⁾ 第3の命令が第1、第2の目的であって、これは博愛精神である。労働、収入、献金の三つが博愛の見地から結合される。この観点から勤勉と節約という経済的徳が重視された。かくしてウェスレーはキリスト教の社会的博愛的側面を強調するのである。

「私はまずキリスト教は本質的には社会的宗教であること、そしてキリスト教を孤独の宗教にすることは、それを破壊することであることを示そうとつとめるであろう。」⁽⁴⁾ キリスト教は本質的には博愛主義である。この点においてウェスレーは功利主義者ベンサムと同じ傾向の人である。もちろん前者は「熱烈な積極的伝導者」であり、後者は「坐り勝ちな合理主義者」であることにおいて相違がみられるが、かれらにはつぎのような共通点がある。⁽⁵⁾ 第一にベンサム主義も福音主義もともに立法の改革に参加することによって言語道断な特権を除去しようとした。第2に両者とも個人主義である。ベンサム主義は政治における個人主義であってその社会観は原子論的である。人類の社会は原子の集合であるとされる。福音主義は宗教における個人主義であって、それは各個人の魂の救済を直接関心事とした。第3に両者とも伝統に対して冷淡であった。ベンサム主義は歴史を無視し、福音主義はローマ教会の神学を無視した。このように見てくると両者の間の共通点として博愛主義・進歩主義・改革者があげられる。われわれはこの点においてウェスレーおよびベンサムがグリーン思想形成に少なからぬ影響を与えたことを見出すことができる。

メソジスト運動は下層階級の人々を救済の対象として伝導した。グリーンも下層労働者に対して同情的であった。メソジスト運動もベンサム主義も第18世紀中期以後次第に成長し、19世紀中期にかけて英国の思想を動しただけに、T. H. グリーン(1836—82)の思想形成にこれら2つの思潮が影響をいくらか与えたものとみてよい。

われわれはこの影響をつぎの2点に見出すことができるようにみえる。第1はグリーンが「市民と改革との教説」を主張したことである。グリーンが何故市民に関心をもったか。かれが何故改革——庶民の福祉のためになす改革——を主張し、政治に関心をもったか。これらの疑問を発するときわれわれは産業革命によって台頭した人口の増大と新しい都市の誕生とに注目せざるを得ない。ウェスレーの関心も宗教的観点から新しい階級、下層階級に接近して行った。かれらは宗教的にも政治的にも救済を求めており、この要求にウェスレーが答え、グリーンも答えようとした。第2にグリーン思想には Self-Sacrifice とか self-devotion といわれる言葉に示されているように献身の徳が王座を占めている。これはグリーンが福音主義から学んだものとみてよい。

福音主義は「情緒的原動力、大義への献身、自己犠牲」を教え込んだ。「グリーンは歴史的宗教から非教義的神学へキリスト教を変えるであろう形而上学体系によって原教旨主義者を福音主義に置き換えようとした。これは福音主義的な家族で訓練された人々の注意を、来世での個人的救済の手段から現世の状態の改善に向けるであろう。神学におけると同じく政治学においてグリーンが展開した市民権と改革とについての教説は推移する世代へ訴える代理信仰として最もよく理解される。」⁽⁶⁾

2. オックスフォード運動

英国国教会における第2の発展方向として「高教会派」の動きが注目される。これはカトリック教的勢力の一面であり、その典型的なものが「オックスフォード運動」である。この運動はキープル (1792—1866)、ニューマン (1801—90)、フルード (1803—36) によって起された運動で、1833年に端を発する。この運動とメソジスト運動とはその目的が全く異なる。前者は訴えるべき対象が牧師や知識階級であって儀式や伝統的な教義を主張する。後者は非国教徒や庶民に福音を拡めることを目的とした。ところでオックスフォード運動は何故起ったのであろうか。周知のように1832年に選挙法改正案が議会を通過し、これによって下層階級や非国教徒も政治に参加する希望をもつことができるようになった。自由主義は政治において勝利を得、この勢いは英国国教会に浸透し、その改革を迫られた。これに対抗するために英国国教内では自由主義に対して批判的な一群がいた。他方メソジスト運動に対してもそれが墮落しつつあるとの理由から批判の声が高まってきた。このような歴史的変化の中でオックスフォード大学の教授・学生を中心として起った宗教運動が所謂「オックスフォード運動」(The Oxford Movement) である。

ではオックスフォード運動の特色は何であるか。それは英国国教会の伝統であるところの保守的教父的聖さん形式を護持し、主張することであった。ニューマンによって起草し計画されたといわれるこの運動はつぎの四項目⁽⁷⁾を主眼とするものであった。1) 生命の唯一の道はキリストの肉と血とにあずかることである。2) 明白に権威づけられた手段は聖さん式である。3) 聖さん式の継続と正しい管理とのために明白に権威づけられた保証は司教の使徒的職権である。4) 現在の状況ではこれらの事柄が軽視されかつ実際に否認されるであろう危険を考慮にいれてつぎの若干の誓約を提案する。①それらを教え込む機会を監視すること、②③同じ目的のために書物と小冊子とを配ること、④教会会員の間で日常の共同祈禱の復活を確保すべく努め、主の晩さんに一層しばしばあずかること、⑤祈禱書の権威なき変更を抵抗すること、⑥最も過少評価されたり、誤解されたりするように見える規律や礼拝の問題点について説明を広めること。以上がオックスフォード運動の目標である。これらを一言で要約すれば「聖さん重視主義」(sacramentalism) である。上記の6つの誓約の中にもあるようにオックスフォード運動は小冊子を配布する仕事をしたので、“Tractarians”ともよばれた。ニューマンは牧師を「使徒の代表者」とみなし、その地位に対して非常な権威を与えた。かれは「説明ではなくて聖さん式が神の恩寵の源泉である」⁽⁸⁾といている。オックスフォード運動が説教に重点をおいているのではなくて聖式に重点を置いていることがわかる。

さてオックスフォード運動はオックスフォード大学を中心として熱狂的に拡大し教授や学生の中にはこれに共鳴するものが多かった。ニューマンの影響は魅力的でありかつ無比であった。しかし後にはこの運動は英国国教会内に非難を起した。1841年、小冊子第90号においてニューマンが書いたかの39ヶ条の信仰ヶ条についての解釈が非難の種となった。39ヶ条のうち、21条、28条、35条についてのニューマンの独創的解釈が英国国教会内の非難の対象であった。ニューマンはこれらについて人為的勝手な解釈をしているとみられたのである。これは英国国教会の伝統的解釈に反するとされた。ニューマンはもともと英国国教会に忠実であったのであるが、このような論文を發表することによって次第に英国国教会を裏切ったことになり、ローマ教会に傾いて行った。1843年ついにニューマンは改宗し、ローマ・カトリック教会に入った。ニューマンをローマ・カトリック教会に改宗させた原因の1つとしてオックスフォード運動の指導者であり、かつ友人であったフルードの影響を無視することはできない。「私がローマに対する讚美、宗教改革に対する嫌悪、聖母マリアへの献身、実在の存在信仰を得たのはフルードによるものである、とニューマンはいつている。」⁽⁹⁾ ニューマンは1841年の小冊子90号発刊の年から45年の改宗までの4年間その反響と非難とに対して耐えられなかったためか、公的活動から遠ざかり社交から身を引き、オックスフォード近辺のところで陰とん生活を送っていた。

以上がオックスフォード運動の始まり、特色、経過の概要である。ところでグリーンはこの運動に対していかなる態度をとったであろうか。オックスフォード運動は1833年から始まった。グリーンは1836年に誕生し、1855年にオックスフォードのベリオル・カレッジに入学した。オックスフォード運動は1841年を頂点として最盛期に入った。そして以後衰微していった。しかしグリーンがベリオル・カレッジに入った55年においても運動の余熱は残っていたとみてよいし（ニューマンは1890年に死亡したことからもこのことは推察される）、グリーンがラグビー校時代においてもこの運動が関心の対象とされなかったとはいえないであろう。とすればグリーンはオックスフォード運動に対して同調的であったかそれとも批判的であったかを確かめておく必要がある。

J. ブライスによれば「グリーンが大学生時代の間オックスフォードで最も有力な2つの知的勢力は宗教的分野においては J. H. ニューマンの著作（これらの影響はすでにその極点を過ぎていたけれども）と論理学および哲学的分野においては J. S. ミルの著作とであった。グリーンはこれら2つのいずれにも（敵対の点を除けば）影響されなかった。」⁽¹⁰⁾ これからわかるようにグリーンはニューマンに敵対こそすれ決して影響されることはなかった。グリーンはオックスフォード運動に対して対立的であり、批判的であった。ではグリーンは何故ニューマンに敵対したのか。この問題は両者の思想の相違、宗教観の相違を明らかにすることによって解決される。ではこの相違点は何であるか。すでに考察したようにオックスフォード運動は儀式と権威とを重視したが、グリーンは理性と信仰とを一致させようとした。いわば前者は権威主義であり、後者は合理主義である。「ピュゼーやリドンによって導かれた高教会の人々はニューマンの後を追ってローマ教会に入ってゆくことはなかったけれども、啓示の真理は単純な人間理性にわからないものであることを今まで通り主張しつづけた。それ故、創造についての聖書的説明並びに聖書に記録

されている奇跡は権威にもとづいて信じられなければならない。』⁽¹¹⁾ これによってわかるように、ニューマン派の人々は宗教的真理は理性によってわかるものではなく権威にもとづいて信仰することによってのみわかると主張する。しかし、19世紀において発達しつつあった科学の洗礼を受けた知識階級にはニューマン派の教説は疑問とされたに違いない。グリーンは新しい宗教を求めていたのであるが、これは当時の理性を重視する人々の要求でもあった。広教会が起らなければならない理由がここにある。

グリーンがオックスフォード運動に対して批判的・敵対的であった理由として2つが考えられる。その一つはかれがドイツ哲学——理性の哲学——を学びとり、かくして理性を重視したことである。「グリーンは思想の基礎は明らかにヘーゲル的であったが、かれは決してドイツ哲学者の単なる弟子ではなかった。グリーンはカントから出発した。そしてカントの矛盾と欠点とを除くために主としてヘーゲルを用いた。』⁽¹²⁾ 第2はグリーンがベリオル・カレッジに入ってジョーウィットの指導を受けたことである。ジョーウィットは理性的信仰を目ざしていた。周知のようにかれはプラトンに通じ、ドイツ哲学に精通し、これらに共通する理性とキリスト教信仰とを合理的に調和させようとした。⁽¹³⁾ これがグリーンやトインビーによって継承発展された。

3. 広教会の成立とその背景

1850年以後英国国教会において広教会（Broad Church）という一派が起った。この教会は高教会および低教会から区別して名づけられた名称であって、自由主義的思想家によって支持された。さて広教会とはいかなる教会であるか。それは何故起ったのであろうか。われわれはそれが起らなければならなかった歴史的背景を知る必要がある。広教会の成立はメソジスト運動やオックスフォード運動と大いに関係があるが、それが起った理由は直接的にはつぎの諸点に求められるようにみえる。第1は清教主義への反省、第2はドイツ哲学の影響であり、第3は英国における合理主義の伝統であり、第4は自由主義の勝利であり、第5はオックスフォード運動に対する反動、第6は科学の進歩の点である。

まず第1の点から考察してみよう。広教会はカルビニズムの一分派であるといわれる。⁽¹⁴⁾ ところでイギリスにおいてはカルビニズムは清教主義として発展した。清教主義はマシュー・アーノルドが「教養と無秩序」において批判するように、優美と叡智とを欠き、考え方が偏狭でありかつ地方人根性的であるとみられた。かれがつぎの一文においてのべていることはこの偏狭さを是正するために広教会派が起ったことを示している。「それでわれわれは清教主義をもっと国民生活の主流と接触せしめることによってこれを匡正しようとするのである。この点、われわれの考えはウェストミンスター寺院長の考えと全く同一である。実際、彼と私とは同じ学校（ラグビー学校）で訓練を受け、清教主義の偏狭を注意し、これを匡正したいと願ふようになった。しかし彼とその仲間はまだ単に現在の英国教会にいわゆる最も広教會的な性格えようと欲しているようである。』⁽¹⁵⁾

第2にドイツ哲学はコールリッジの「反省への助」（1825）を通してイギリスに紹介された。かれは信仰を合理的に考えた。すなわちかれは理性と意志との両概念を用いて信仰の本質を明ら

かにしようとしたが、これが自由主義的思想家に受け入れられ、かくして広教会を成立させる誘因となった。コールリッジによれば「後者（意志）によって信仰はエネルギーとならなければならない」とされ、「前者（それは理性である）によって信仰は光となり、認識の形式となり、真理を見ることとならなければならない。」⁽¹⁶⁾といわれる。かれにおいては信仰は一面意志であり力であるが、他面それは理性であり、知である。信仰はこれら二面をもつとされるが、かかる考え方は理性的信仰を目ざす広教会派の人々に有利に影響した。⁽¹⁷⁾しかしコールリッジは広教会の成立にのみ貢献したのではなく、「とくに教会を高調したことから保守的な高教会派の道準えもした。」⁽¹⁸⁾

第3に広教会は英国における合理主義の伝統の復活とみられないことはない。イギリスは経験論を主流とする国であるが、17世紀においてケンブリッジ・プラトニスト達が現われた。R・カッドワース（1617—88）やH・モーア（1614—87）は広教会派の思想に類似した合理主義の先駆者とみなされた。かれらは“Latitudinarians”とよばれる自由主義的な哲学者であった。イギリスにおけるプラトニズムはこれらの哲学者に求められるだけでなく、さらに遠くは9世紀に活躍したJ・S・エリウゲナ（810—80）にも求められる。かれはアイルランドに生れ、イギリスにおけるプラトニストの先駆者である。かれは権威よりも理性を重んじた。当時としてはかれは急進主義者とみられた。ケンブリッジ・プラトニスト達より約40年遅れてプラトニズムの系統の人が2人オックスフォード大学から現われた。その1人はJ・ノリス（1657—1711）であり、もう1人はA・コリアー（1680—1732）である。当時はかれらの合理主義はロックやヒュームの強力な経験論に圧倒され、影がうすかった。イギリスはこのようなプラトニズムを細々として伝統にしながら18世紀末にはコールリッジ（1772—1834）を通してカントの哲学が紹介され、J・H・スターリング（1820—1909）を通してヘーゲル哲学が紹介された。このようにして19世紀に入ると次第に理性を重視する思想が注目されてきた。

第4は自由主義の勝利である。マッシュー・アーノルドは「自由主義」とは何であるかという問いに対し「それは政治上においては1832年の選挙法改正法案と地方自治を、社会的領域に於いては自由貿易と自由競争と商工業者の大身代を拵らえることを、宗教的領域に於いては国教反対派の国教反対主義と新教の新教主義をその信仰の基点としてもった大きな中流階級的自由主義であった。」⁽¹⁹⁾と答える。このような新しい変化は中流階級を中心とする勢力の勝利であり、その中には非国教徒やプロテスタントが含まれていた。かれらの政治的経済的発言力の増大は宗教界へも動揺を与え、上層階級によって支持される高教会派と対立せざるを得なかった。英国国教会はかくして対立・分裂の危機を含んでいた。この危機を克服するために英国国教会のあり方を教義や信仰や組織の上から考え直す動きが出てきた。このようにして生まれたのが広教会であってそれは包括的教会ともよばれた。この派の人々は英国教会は高教会でも低教会でもなくて異った教義や信仰を包括する教会であると主張した。

第5に広教会の成立の源をわれわれはオックスフォードのオリエル・カレッジに求めることができる。ここはオックスフォード運動の発祥地でもあった。オリエル・カレッジには広教会派の

先駆者としてホエトリー（ダブリンの大監督）や T・アーノルド（ラグビースクールの校長）がいた。この人々は「より初期のオリエル学派」とよばれ、「後期オリエル学派」から区別される。「後期オリエル学派」の中心人物はニューマンである。ホエトリーやアーノルドは福音主義派（低教会派）とは無関係であり、それには共鳴しなかった。しかしかれらは高教会派の教義からほかに遠ざかっていた。かれらは両派の中道を歩む信仰を求めていたと考えられる。ホエトリーは宗教思想家であるが、事柄を合理的論理的に扱った。アーノルドは1825年オリエル・カレッジのフェローに選ばれた。「かれはその信仰においてイエス・キリストの神性の真理に第1位を置く。かれは聖書の絶対的無誤謬の教説を拒絶する。」⁽²⁰⁾かれはコールリッジから影響されて「強い道徳的熱望」をもっていた。かれらはオックスフォード運動に対しては批判的であった。

第6に科学の発達と考えられる。近代の科学教育を受けた人々にとっては旧約聖書の創世紀の第1章は理解できないところであったに違いない。また新約聖書の宇宙論も知識階級には信じられないものであった。かれらは初期キリスト教に含まれている独断的・超自然的・奇蹟的なすべての部分を神学から除外し、合理的要求に一致するように聖書を解釈することを求めた。この要求に応じたのが広教会派の主張である。それは時代の新しい動き、とくに科学に適應するために生まれた。

以上が広教会が起った歴史的背景である。では広教会とはいかなる性格の教会であるか。すでにふれたようにそれは英国国教会内では中道的地位を占める。Broad Church の“Broad”の意味は以下のように考えられる。この名前をつけた人は A・P スタンレー（1315—81）である。かれはアーノルド校長のもとでラグビー・スクールに学び、そしてオックスフォードのペリオル・カレッジに入った。後にはかれはウェストミンスター寺院長になった。かれの思想はつぎの2つの原理によって生涯貫かれたという。⁽²¹⁾第1は宗教的問題において女皇の所謂主権は實際法の主権に外ならないという思想である。この思想から英国国教会は常に国家と提携して国教会でなければならないということが導き出される。第2は英国教会は高い（High）のでもなく低い（Low）のでもなく広い（Broad）のであって、それは常に対立し、矛盾した意見を包括してきたし、包括すべく定められていたという考え方である。したがって広教会は包括的教会（Comprehensive church）である。当時英国教会においては39ヶ条および祈禱書に含まれている教義について対立した意見が出ていたので、スタンレーはこの問題については厳格な線を引くことによるよりも寛大な考え方によって解決しようとしたわけである。

4. 広教会派とその思想

広教会派に属する主な人々は F・D・モリス（1805—72）、T・アーノルド（1795—1842）、A・P・スタンレー（1815—81）、F・W・ロバートソン（1816—53）、B・ジョーウィット（1817—93）、C・キングスレー（1819—1875）である。モリスは英国の神学者でユニテリアン派の牧師の息子であった。かれは J・スターリングとともに「使徒クラブ」を創設したこともある。かれは1830年頃 the London Literary Chronicle を編集した。1834年かれは聖職を授けられた。1840年かれはキングス・カレッジにおいて英国史および文学の教授に任命された。モリスが広教会派

の先駆者として有名になったのは1853年に「神学論文」(Theological Essays)を刊行したことによってである。とくにH・L・マンセルとモーリスとの白熱した論争は当時注目された。かれの影響力はその見解からよりもかれの人格、被圧迫者への情熱的な同情から由来したといわれる。そのためか、かれは「キリスト教社会主義」運動を起した。

アーノルドは自由主義的な人であったが、一般には英国のパブリック・スクールの教育改革者として有名である。かれはラグビー・スクールの校長として自ら教育改革をし、「キリスト教的紳士のための学校」を目的とした。かれの改革は英国の他の学校によって模倣された。かれから影響を受けた人としてスタンレーがあげられる。かれは1850年「エディンバラ評論」において英国教会のあるべき姿を主張した。この主張によれば英国教会は相対立する意見を包括するものであるとされ、中道的な寛大な立場を表わした。これより先1836年スタンレーは a letter to the Bishop of London を公刊し、この中で39ヶ条および祈禱書に対する牧師の同意をゆるめるように主張した。またかれは「論文と評論」(Essays and Review)において高教会派に反対する意見をのべた。スタンレーは英国国教会は国家と対立するものではなくて国家と共同してゆかなければならない——すなわち国教会でなければならぬ——と考える点において非国教徒から区別される。この点かれは国教徒の立場でものを考える。しかしかれは教義に重点をおく高教会派から区別される。スタンレーは真の救いはドグマに依存しないと主張する。

当時英国の宗教界では国家と教会との関係をどのように考えるかが最大の問題であったようである。市民は国家の一員であるとともに英国教会の一員でもあるので、市民は両方の規則に従わねばならないことになる。とくに英国教会には39ヶ条と祈禱書とがあって、キリスト教徒はこれらの規則に従わねばならない。しかし自由主義者は合理主義を主張するところからこれらの規則に反対した。そこでスタンレーにとってはこれら自由主義者を英国教会から除くことによって英国教会を狭くする方が有利であるかそれともこれら自由主義的な人々を技術的にこの規則に従わせることによって包括的教会とした方が有利であるかが問題であった。この問題を解決するためにかれは英国教会の頂点に女皇を置き国家を教会に一致させようと考えた。このような考え方にもとづいて広教会が成立したのである。

スタンレーの思想は英国教会内において各方面に反響し、批判されたがその人格は純粋さに満ちていた。「かれは自分を知っている人々に心の親切さによってのみならず、目的の著しい純粋さと高尚さの故に印象を与えた。かれの心の中には卑しいものとかつまらないものとか利己的なものは潜んでいないようにみえた。諸君はかれを正しいと考えたり間違っていると考えたりするだろう。しかし諸君はかれが真理を求めて努力していたことを決して疑わなかった。かれは単に公正な人であるだけではなかった。かれは情熱をもって正義を愛した。かれが教義的相違を軽視したのは部分的には恐らくかれにとって正義、善、名誉、慈悲が人生において最も重要性をもっているように見えたからである。」⁽²²⁾

ベリオル・カレッジのマスターでありかつグリーンの師であったジョーウィットはスタンレーとの交わりによって自由主義的思想をもつように導かれた。かれがキリスト教信仰についていか

なる考えをもっていたかは詳しくは知られないが、かれがつぎのような信仰を晩年のべたことを考えると、かれの信仰はグリーンのそれに近いとみてよく、また広教会派の思想の一端をうかがうことができる。「祈りは ①神との交わりとして、②われわれの内に最高善を認識すること、③法則、すなわち神の意志に対する強烈な服従、④われわれにできる範囲内での強烈な熱望として考えられよう。」⁽²³⁾ ジョーウィットは1855年に「聖パウロ書簡」を完成し、1860年には「論文と評論」に論文を発表した。かれはこれらの著書や論文によって「異端」として強い攻撃を受けた。グリーンはベリオル・カレッジにおいてジョーウィットの指導を受けた。「私が過去の経歴を回顧するとき、私の進歩は年輩の友人たち（かれらに偶然出会ったことは私の幸福であった）、すなわちジョーウィット、コニングトン、C・パーカーとの交わりに主として負っているようにみえる。……ここでのべた三人の中でジョーウィットは私が最大のかつ永続的なお陰を負っている人であった。」⁽²⁴⁾ かくして広教会の思想はスタンレーの影響を受けたジョーウィットを通してグリーンにまで及んだ。

キングスレーはキリスト教社会主義運動に心から身を投じた。この運動の指導者はF・D・モーリスである。すでにのべたようにモーリスは広教会の先駆者である。かくて広教会の思想はモーリス、キングスレーの線においてキリスト教社会主義に発展した。それは広教会派の信仰が社会的奉仕活動と結びつく必然性をもっていたからである。キングスレーのキリスト教社会主義は日本にも影響を与えた。⁽²⁵⁾

広教会派にぞくする人は以上が主な人々であるが、この外に著名な人が幾人かいた。今これらの人々をあげればつぎの人々である。カンタベリーの大監督であったA・C・タイト(1811—82)、歴史家J・R・グリーン(1837—83)、マンチェスターの監督J・フレイザー(1818—85)の3人があげられる。この外に経済史家A・トインビー(1852—83)もあげられよう。タイトが広教会的思想をもっていたことはつぎの一文によってわかる。「タイト自身は穏健な広教会態度とよばれてよいものに傾いた。そして教義の問題においてはオックスフォード運動あるいはカトリックの見解よりも福音主義的見解に一層傾いた。」⁽²⁶⁾ 広教会は寛容と弾力性をその特色として持っているが、タイトもこのような思想をもっていることはつぎの一文に示されている。「かれは牧師の署名承認の新しい、あまり厳格でない形式を導入する議会の法令を得ることにおいて指導的な役割を果たした。英国教会はそれ自身を世論の動きに適応させることによってのみ国家教会としての地位を維持することができるとかれは悟った。」⁽²⁷⁾

J・R・グリーンは広教会の名づけ親であるスタンレーから非常な影響を受けた。「グリーンを評価しかつかれに影響を与えたようにみえる唯一の著名な人は当時教会史およびキリスト教会法規の教授であったところのスタンレー司祭長であった。グリーンはスタンレーの講義に出席した。そしてスタンレー（かれの青年に対する親切な関心は失敗しなかった）はグリーンによって感心させられ、歴史へグリーンの研究を向けることにいくらか貢献した。」⁽²⁸⁾ われわれはスタンレーとグリーンとの結びつきによってグリーンが広教会へ傾いていることを推察することができる。「グリーンはF・D・モーリスの著作によって大いに影響された。グリーンはモーリスを知

っており、しばしばかれに会うのが常であった。そしてモーリスの純粹にしてかつ高尚な性格はかれの説教以上にさえ恐らく深くグリーンに影響を及したことであったらう。⁽²⁹⁾ かくしてわれわれはグリーンがモーリスとスタンレーとから宗教的感化を受け、広教会へ傾いていったことを知ることができる。

J・フレイザーは英国国教会内に新しい型の教会を創造した人として有名である。かれは最初は高教会派の思想をもっていたが、後には広教会に傾いた。「フレイザーは穩健な高教会信徒としての生活を始め、そして広教会の地位とよばれるであろうものに漸次、半ば無意識的に傾いた。そしてかれは英国国教会が人々の教育を企てるべきであるという要求とその教育に対して自から責任をもつべきであるという義務とを主張したが、教義的差異についての小さな点をほとんど強調せず、儀式の点をほとんど気にしなかったようである。」⁽³⁰⁾ A・トインビーの宗教思想については筆者はかつてふれたことがあるので⁽³¹⁾ ここでは省略する。

5. グリーンと広教会

以上の考察からわれわれは第19世紀におけるイギリスのキリスト教界の動向を知ることができる。グリーンはこうした動きと無関係にその思想を形成していったとは考えられない。そのことについてはすでに若干ふれたが、ここではグリーンが広教会的思想に傾いていることを明らかにしたい。グリーンはピューリタニズムの傾向をもっていることはつぎの一文によってわかる。「かれ（グリーン）はユーモアのセンスをもっていた。またカーライル（かれはミルトンやワーズワースとともにグリーンに最も徒響を与えた人々の一人である）とともにピューリタニズムを底にもっていた。しかしグリーンにおいてはピューリタンの色合は一層親切であり、そして就中普通の人々に対して一層やさしかった。」⁽³²⁾ グリーンが下層階級に対して同情的でありかつ社会改革に熱心であったのはこのような宗教的気質をもっていたからであろう。ところでグリーンがピューリタンの傾向をもっているからといって直ちにかれが広教会派の人であるとはいえない。ただわれわれはグリーンが進歩的自由主義的思想をもっていた宗教的背景の一端を知ることができるだけである。広教会の思想も自由主義的思想であるが、グリーンとの関連を明らかにするためには広教会の特色を改めて考える必要がある。広教会の主張は何であったか。それは国家と教会との関係を再検討すること、信仰と知識との関係を近代的に再吟味すること、信仰と社会改革（信仰と行動）との関係を明らかにすることであった。ここでは信仰と知識との関係をグリーンがどのように考察しているかを見ることによってかれと広教会との関連を考えてみることにしよう。その前にさきにあげた3つの問題が第19世紀のイギリスにおいて何故とりあげられなければならなかったかについて言及しておく必要がある。

まず第一の理由は科学の進歩である。科学的知識をもった人々がキリスト教の伝統的儀式や祈禱に対して疑問をもち、新しい宗教を求めていた。しかしこの要求は英国国教会の外では不可能であり、したがってこの世界の中で新しい教会観、新しい信仰観を確立する外はなく、そこに困難もあったわけである。したがって英国国教会内で牧師にとって考えられることは信仰と新しい科学的知識とをいかに調和させるかであった。すなわち信仰の合理化がかれらの課題となった。

周知のようにダーウィンの「種の起源」(1859)が発表されていた時代であるからキリスト教徒にとって聖書の記録が信じられないことになれば一大危機となる。こうした危機は台頭してきた有力な思想、すなわちコントの実証主義、合理主義、不可知論、唯物論によって助長されてきた。広教会が起ったのも、これらの思想に対決して新しい信仰の基礎を確立しようとしたからである。

グリーンは時代のこうした要求に答えるべく信仰と知識との関係を問題にした。「正しく理解された信仰と知識とは矛盾することはあり得ない、何となれば両方ともその源泉を理性または自己意識にもっているからである。」⁽³³⁾これがグリーンのお考えである。グリーンにおいては信仰も知識も同じ1つの源から出発するから両者は矛盾しないのである。われわれは通常信仰と知識とは矛盾するものと考えやすいが、そのわけを根源的には追究しない。ではグリーンは理性または自己意識をどのように考えているのであろうか。自己意識とは神についての意識であって、これは換言すれば真実在についての意識であり、完全性の意識である。要するに意識とは完全なものを意識することである。しかし人間の意識は感覚の制限によって不完全である。不完全な意識ではあるが、これは完全なものを意識することができる。かくして人間においては理性の自己実現が要求され、それは科学と宗教とにおいて展開される。「1つの実在および1つの完成の意識（これが神の意識である）は科学と宗教、悟性と愛との源である。両方において神はわれわれに対して自己自身を伝え、両方においてわれわれはわれわれの諸制限から部分的自由を達成しそしてわれわれの真の自我に至る。」⁽³⁴⁾われわれは科学と宗教とを通して神を実現する。知識において現性は自己を実現するが、これは完全な実在を求めての漸次的実現である。理性は完全な実在への要求である。他方理性は人間生活において自己を実現するが、それは完全な生活の実現である。理性はかくして2つの方向において不完全にはあるが自己を実現する。しかしこの理性は「神との潜在的統一の意識」であり、「この統一をかれの生活の中に実現しようとする努力」である。だから意識は悟性と愛、知性と意志とをともに含むものである。これがグリーンにおいては信仰である。信仰は人間の内にいるこうした追求心、探究心、真理を求める心、完全な生活を実現しようとする力である。

以上のような考察からしてグリーンは信仰と理性とを矛盾するとは見ないでむしろ1つのものとみていることがわかる。すなわちかれの信仰は理性的信仰とよばれてよい。ここにグリーンが広教会的であるといわれる理由がある。「グリーンは広教会性は歴史的用語で語られているキリスト教の伝統的独断的神学を止めて、理想主義者の形而上学に基礎づけられた再陳述に有利なようにする試みで見出される。このようにしてかれは科学の真理と宗教の真理との間にある外見的矛盾を除去することができ、かれの哲学を通して信仰への論争の余地なき基礎を用意することができる」と考えた。⁽³⁵⁾

つぎにグリーンが広教会派の人であることは社会改革へのかれの関心とかれの宗教観との関連からうかがうことができる。グリーンは住宅、賃金、選挙改革、都市の衛生などの問題に関心をもち、これらの解決に努めた。こうした関心が起ってきた1つの思想的背景として広教会派の思

想が考えられる。というのはグリーンは教義とか奇蹟を信仰の根本条件とはみななかったからである。これらを主張するのは高教会である。グリーンは信仰は人々を救う働きに行動として移るような思慮ある熱情であると考えているからである。すなわち、グリーンは信仰はヒューマニズムに立脚するものである。高教会の信仰を静の信仰とよぶことができるとすればグリーンは信仰は動のそれであるといえよう。このことはつぎの一文によって推察される。「単なる宗教的力は近代の腐敗の表面にふれるにすぎない。『主よ、主よ』と叫ぶ人々はすばらしい仕事を何らなさず、そして生活の組織化に決して近づかない。唯一の希望は宗教的熱情（これは僧侶の熱情と同じく克己的な、そしてもっと骨の折れる考え深いものだが）を行動へと移すような『世俗的』作用および『人間的な』哲学に存するようにはみえないか。」³⁶⁾ ここにのべられている考え方は広教会派の思想に近い。この思想はすでに考察したように博愛的実践的である。したがってそれは政治と結びつく可能性がある。リヒターは「神学における自由主義と政治学における自由主義との結合は偶然ではない。グリーンは神学はエルスマーのそれと同じヒューマニズムに基いた倫理を示している」³⁷⁾ といっている。広教会派の思想が実践的であることはモーリスやキングスレーがキリスト教的社会主義を唱えたことによってもわかる。

最後にグリーンがキリスト教信徒であったかどうか、もし信徒であったとするならばそれはいかなる意味においてであるか、もし信徒でなかったとするならばそれはいかなる意味においてであるかを考察しておこう。「グリーンについて聞いたり読んだりする人々によって確かに尋ねられる質問、『グリーンはキリスト教信者であったか』に対する答は『キリスト教信者であること』が何を意味しているかにかかっている。もしそれが各人は自分の内に神をもっていること、宗教は低い自我の絶えざる死であり、より高い自我の生に至ることであること、これらの真理は他の知られたどんな人によるよりもナザレのイエスおよびかれの追随者の幾人かによる思想と生活との中に一層生々と実現されたことを信ずることを意味するならば、疑いもなくグリーンはキリスト教信者であった。もしその意味が上述の真理がイエスは他の人間にとっては不可能である状態の下で生れかつ死んだという事実依存することを信ずることであるならば、同じく疑いもなくグリーンはキリスト教信者ではなかった。」³⁸⁾

註

- (1) Melvin Richter, *The Politics of Conscience* (Weidenfeld and Nicolson) 1964 P. 18
- (2) Ibid. P. 19
- (3) Ibid. P. 21
- (4) Ibid. P. 17
- (5) D. C. Somervell, *English Thought in the Nineteenth Century* (Methuen & Co. LTD.) 1957, PP. 102—3
- (6) Melvin Richter, *The Politics of Conscience*, P. 19
- (7) George Park Fisher, *History of Christian Doctrine*, New York, 1896, P. 454
- (8) Ibid. P. 456
- (9) Ibid. PP. 458—9
- (10) James Bryce, *Studies in Contemporary Biography* (Macmillan and Co.) 1903, P. 93
- (11) Melvin Richter, *The Politics of Conscience* P. 26

- (12) Hiralal Haldar, *Neo-Hegelianism* (Heath Cranton LTD.) 1927, P. 18
- (13) 拙稿「オックスフォード大学の伝統と T. H. グリーン」(岡山理科大学紀要, 第2号, 昭和41年12月) 参照.
- (14) G. P. Fisher, *History of Christian Doctrine*, P. 477
- (15) マシュー・アーノルド (多田英次訳) 教養と無秩序, (岩波文庫), 33頁
- (16) John H. Muirhead, *Coleridge as philosopher*, (George Allen & Unwin) 1954, PP. 221—2
- (17) *Ibid.* P. 246
- (18) 高柳伊三郎, 基督教思想史概説, (新教出版社), 昭和33年, 176頁
- (19) マシュー・アーノルド (多田英次訳) 教養と無秩序, 80頁—81頁
- (20) G. P. Fisher, *History of Christian Doctrine*, P. 451
- (21) ここにまとめた2つの原理はつぎの文献から要約したものである. J. Bryce, *Studies in Contemporary Biography* PP. 78—9 *Ency. Brit.* 中の Stanley の項
- (22) J. Bryce, *Studies in Contemporary Biography*, PP. 82—3
- (23) Melvin Richter, *The Politics of Conscience*, P. 63
- (24) R. L. Nettleship, *Memoir of Thomas Hill Green*, (Longmans, Green, and Co.) 1906, P. 12
- (25) キングスレーのキリスト教社会主義は明治29年片山潜によって日本に受け入れられた. 朝日新聞 (昭和42年5月26日岡山版) の「人物おかやま一世紀」には片山潜についてづぎのように書かれている. 「東京に戻ると, 早稲田専門学校 (現早稲田大学) で英語を教えたがまもなくやめ, 神田三崎町に『キングスレー館』を開き, キリスト教社会事業としてのセツルメント活動を始めた」
- (26) J. Bryce, *Studies in Contemporary Biography*, P. 110
- (27) *Ibid.* P. 113
- (28) *Ibid.* P. 132
- (29) *Ibid.* P. 134
- (30) *Ibid.* PP. 206—7
- (31) 拙稿「オックスフォード大学の伝統と T. H. グリーン」(岡山理科大学紀要, 第2号) 中の「第19世紀におけるベリオル・カレッジの課題と理想主義哲学の台頭」の節を参照.
- (32) James Bryce, *Studies in Contemporary Biography*, P. 87
- (33) R. L. Nettleship, *Memoir of Thomas Hill Green*, P. 148
- (34) *Ibid.* P. 149
- (35) Melvin Richter, *The Politics of Conscience*, P. 27
- (36) *Ibid.* P. 31
- (37) *Ibid.* PP. 29—30
- (38) R. L. Nettleship, *Memoir of Thomas Hill Green*, P. 150

尚イギリスのキリスト教思想史の参考文献としてつぎの著書が有益である.

1. A. トイビー「英国産業革命史」(川喜多孝哉・斉藤泰次郎・杉浦滋・原田禮共訳), 高山書院, 昭和23年
2. 斉藤 勇, 「キリスト教思潮」, 研究社, 昭和30年
3. 木村健康, 「学生生活」(「英国の一思想運動に学ぶもの」), 河出書房, 昭和29年
4. 柏井 園, 「基督教史」, 新教出版社, 昭和31年
5. J. S. ミル「ベンサムとコールリッジ」(塩尻公明訳), 有斐閣, 昭和21年, とくに169頁の註, 訳者序説の10頁を参照
6. 石上良平, 「英国社会思想史研究」, 創文社, 昭和33年, とくに第4章を参照
7. 河合栄治郎, 「社会思想史研究」, 岩波書店, 昭和15年, とくに第3章第6節を参照